

「暹羅国蚕業顧問技師」

——明治期の東南アジア技術援助——

吉 川 利 治*

Japanese Sericultural Experts in the Thai Government during the Reign of King Chulalongkorn

Toshiharu YOSHIKAWA*

During the first decade of the twentieth century about fifteen Japanese sericultural experts were employed by the Thai government to improve sericultural techniques in the northeastern region of Thailand. Manjiro Inagaki, the first Japanese resident ambassador to Thailand, was instrumental in getting the Thai government to hire these Japanese. He was concerned about the encroachment of European powers and strongly advised the government to send Japanese sericultural experts to the northeastern region to deter French expansionism.

For about ten years under the guidance of Prince Phenphatthanaphong the Japanese sericultural experts did much to diffuse agricultural knowledge, spread new sericultural techniques, promote the establishment of an agricultural school, and train

Thai experts. W. A. Graham, the adviser to the Thai Ministry of Agriculture, complained that the efforts of this group only had the effect of decreasing silk cultivation wherever they had been applied, and the government, finding itself unable to lead or force its people to make improvements, abandoned the whole project and left the silk growers on their own. Graham scathingly criticized the Japanese for not producing any permanent results and for using methods which were both complicated and wasteful.

The Japanese, however, received the understanding and cooperation of Prince Phenphatthanaphong, and together they fostered capable agricultural officials and laid the foundation for Kasetsart University in Bangkok.

は じ め に

本稿は、明治末期、日本人養蚕技師の一団が、タイ国の蚕業顧問技師として雇われ、タイ国農務省の部内に一部局を創設した顛末を、タイ国国立公文書館に保存されている文書によって明らかにし、当時の日本・タイ両国の政治的経済的な意図がどのように作用し

ていたかを考察する。¹⁾ 当時、東南アジアでは唯一の独立国であったタイ国は、独立維持のために並々ならぬ努力を払っていたが、そのタイ国の独立維持に一役を担おうとした日本人の姿については、筆者が前論〔吉川 1978〕で述べたところであるが、タイの地で蚕糸業

* 大阪外国語大学 タイ・ベトナム語学科；Thai & Vietnamese Department, Osaka University of Foreign Studies

1) 本稿は、昭和52～54年度文部省特定研究「東アジアおよび東南アジア地域における文化摩擦の研究」の中の「日本の南方関与と文化摩擦」班および「現地実態調査」班での研究成果の一部として執筆されたものである。

の開発を試みた日本人蚕業顧問技師たちも、蚕糸業の発達による急成長を遂げた明治日本を背景に、タイ国の産業発展を促すという意思を持ってタイ国へ進出した明治の日本人グループである。

この日本人蚕業顧問技師に関する研究は、すでに中村孝志氏[中村 1978]によって、明らかにされている。氏の研究は主に蚕業顧問の遺族の間で保存されていた資料と、外務省外交史料館の史料とによって、初めてその姿を明らかにしたものである。本稿では、特にタイ側に保存された公文書およびタイ語資料による裏付けを行い、蚕業開発をめぐる日本・タイ双方の考え方の相違を明らかにしてみたい。

I 「暹羅国の内政改良」²⁾

近代タイ国の政治指導者たちが、自国の近代化を目指した時、彼らは同じアジアにあって、近代化を着々と進める日本の姿を常に追っていた。特に、英仏の二大列強の植民地に挟まれ、領事裁判権の撤廃と関税自主権の回復という独立維持に関わる課題を抱えるタイ国にとって、同じような境遇ながら、文明開化を推進し、欧米諸国に伍すほどの勢力を持ち始めた明治日本は、タイ国が目指す国家像の範たり得た。1868年(明治元年)に即位したラーマ5世チュラーロンコーン王(Čhulalongkōn, Phrabat Somdet Phra Čhunlačhōm Klao Čhao Yu Hua)が、自ら政治機構の改

革に着手する前に、王弟たちから国家体制改革のための建白書を受け取っているが、その中で日本の欧化ぶりと、不平等条約改正への動きを伝え、日本に追いつくことを示唆していた。また、同王の皇太子ワチラーウット王子(Wachirawut, のちにラーマ6世)は、王の命令により、1902年(明治35)英国留学を終えての帰途、日本に立ち寄り、女子教育の施設を視察して[山口 1966]、日本の女子教育に関心を示していた。同王の治世中、1888年(明治21)と1904年(明治37)の2回にわたり、教育視察団が日本に派遣されている。そしてラーマ7世プラチャーティポック王(Prachathipok)は、父チュラーロンコーン王が著した『国家統治改革に関する解説』の緒言で、「(シャムの)これほど大きな変革が、何ら紛争も生ぜず順調に成功した例は、他国ではみられない。日本はシャム国のごとく変革を経験しているが、シャムのように順調に進んだのでは決してない。『薩摩藩の反乱』“Satsuma Rebellion”のような国内紛争を経ざるを得なかった」[Prachathipok 1927]と、タイ側の変革の方がスムーズに進められたと称讃しながら、日本の改革に関心があったことを示す文章を残している。

一方、日本側が近代タイ国に関心を寄せたのは、フランスの強引なタイ侵略、いわゆる「暹仏事件」が発生した時であった。この時には、岩本千綱、石橋禹三郎、宮崎滔天らが渡タイしたが、タイ国では何も実を結ぶことができず去っていった。しかし、同じく在野にあって、当時の東南アジアをめぐる国際情勢に関心を払い続けていた人物がいた。稲垣満次郎である。

稲垣は、1893年(明治26)以来、副島種臣の主宰する「東邦協会」の幹事長を務めていた。「東邦協会」は、1895年(明治28)11月に、アジア全局の平和を維持し、現状を保つためには「暹羅、朝鮮、支那ノ存在ヲ維持セサ

2) タイ国は、1939年に国名を改称し、「タイ国」Thailand を用いるようになったが、それまでは「シャム」Siam を国名としていた。本文では現在の国名「タイ国」または「タイ」で統一したが、引用文では「シャム」および「暹羅」という当時用いられていた呼称を使った。なお、「暹羅国蚕業顧問技師」という呼称は、稲垣ら日本側が用いた呼称である。タイ側は「日本人蚕業技師」(Chang Mai Yipun)「日本人職員」(Phanakngan Yipun)と呼んでいた。

ルヘカラス」「暹羅ノ危急ナル事ハ朝鮮ヨリモ太甚シ」という認識のもとに「(1)東洋列国均勢維持ノ為 (2)均勢ノ機関ヲ整備スル為」日・タイ両国が修好通商条約を締結することを、総理大臣伊藤博文、外務大臣西園寺公望に建白していた[東邦協会 1892: 16]。「東邦協会」は主として「東洋諸邦及び南洋諸島に関する講究」を事業目的とし、「……東洋の先進を以て自任する日本帝国は近隣諸邦の近状を詳かにして実力を外部に張り、以て泰西諸邦と均衡を東洋に保つ計を講せざる可からず、未開の地は以て導くべく、不幸の国は以て扶くへし……」ことを設立趣旨とし、1891年(明治24)5月に設立されていた[安岡 1976: 62-65]。幹事長稲垣が「近隣諸邦の近状を詳かに」せんがため、岩本千綱を呼んで講演させた「暹羅談」³⁾は、稲垣に感銘を与えたのであろうか、稲垣は急速にタイ国への関心を高めていた。「東邦協会」は1896年(明治29)に、日暹条約締結にあたっての案まで『東邦協会報告』に発表して、注意を喚起した。いずれも稲垣の意欲によるものと推測される。そして1897年(明治30)外務大臣大隈重信は、稲垣を初代駐タイ国公使に任命した。稲垣はタイ国の首都バンコクに赴任し、「暹羅国をして東洋に於て完全なる独立と致して其の内政の改良其他の事に就ても益々進歩せしめ亜細亜の一独立国の基礎を確立せしめ東洋均勢上の一原素となるように」1898年(明治31)6月に日暹修好通商航海条約を締結させた[稲垣 1898: 117]。

稲垣は「暹羅国の内政改良」のため、とりわけ近代法制定を急ぐため、政尾藤吉を司

3) 『東邦協会報告』第25に講演録が掲載されている。講演がいつ行われたかは不明であるが、発行年が明治26年2月となっているから、1893年の「暹仏事件」の直前に行なったものであろう。内容は、社会、政治、軍事、国際関係にわたり、かなり詳しい。

法顧問としてすでに送り出していた[吉川 1978: 89]。

そしてさらに「暹羅国の内政改良其他の事に就ても益々進歩せしめ」るため、日本人グループをタイ政府部局に送り出した。

II 日本人蚕業顧問

(1) 発端

明治時代の製糸業は、明治維新政府による養蚕の普及奨励と、世界的な蚕糸国であったフランス、イタリアの製糸業に対しヨーロッパでの蚕病の流行が壊滅的な打撃を与えたことにより、またたく間にフランス、イタリアの水準を凌駕した[浅井 1980: 221]。1968年より14年にいたる間の、生糸その他絹類の輸出額は、1億4,155万6,515円で、総輸出額3億224万2,803円の46%にあたっていた[山田 1979: 55]。さらに、1906—1910年ごろには、日本の生糸輸出量は、それまで世界最大の生糸輸出国であった中国の輸出を上回り、日本の製糸業は世界第1位の座を獲得していた。日本の産業革命を導いたのは、実にこの絹業と綿業の二大繊維産業であり、日本の二大輸出産業へと、急速な勢いで発展していった。

このような日本の産業革命を体験しつつ、タイ国へ渡った明治の人々の中で、タイ国内の地方産業として、細々と営まれていた養蚕業に着目した人物がいた。「渡邊某 曾テ當國ノ養蚕及製糸業ヲ改良スル事ノ當國ノ爲メニ大ナル利益ナル事ヲ當國當路大臣ニ建議セルニ大ニ嘉納スル所トナレリ 故ニ中間ニ立チテ斡旋セル公使ハ固ヨリ其連鎖ヲ把持シ大ニ帝國ノ利益及勢力ヲ増進スルノ途ヲ講セサルヘカラス事茲ニ出テテ當國政府ハ稲垣公使及建議者ニ謀ル」[外務省 1902]。渡辺某と上野某は、1900年(明治33)末にタイ東北部に赴き、ナコーンラーチャシーマー

(Nakhōn Ratchasima, コーラート)⁴⁾を中心にして調査を行なっている [R. 5 KS. 8/1]。同じころ、タイの内務大臣であり、チュラーロンコーン王の弟であるダムロン親王(Phra-chao Nōngyathoe Kromluang Damrong-rachanuphap)は、稲垣から、タイの生糸は品質が悪く、地元でしか用いられていない、しかし、養蚕業は広く行われており、養蚕の改良を行えば、久しからずタイの生糸は有力な商品となる、と聞いていた。[KS. 13/13]。1901年(明治34)、渡辺らの調査報告書と思われる英文の報告書を、稲垣はダムロン親王に送っている。内容は次の三つの部分に分かれている。

- 1) A few suggestions as to the conservation of Box-wood in Siam
- 2) A few suggestions as to the Improvement of Sericulture in Siam
- 3) A brief History of Sericulture in Japan

3)は明治維新政府の養蚕業の奨励、技術改良の結果、生糸生産の本場フランスのパリで、パリジェンヌ3人にひとり日本のシルクを身につけていると、その躍進ぶりを紹介している。2)においても、日本の生糸生産高の伸長ぶりを紹介して、日本政府が行なってきたごとく、タイ国の養蚕業の中心地コーラートにモデル養蚕場、モデル工場の設立、専門家の派遣による教育実習、蚕種改良、蚕病知識の普及、養蚕機具の改良、“座繰機械”⁵⁾の各

4) 「ナコーンラーチャシーマー」が正式の県名であり市名であるが、一般には古い地名である「コーラート」(Khorat)と呼んでいる。音節が少なく呼び易いからであろう。本稿でも通称の「コーラート」を用いることにした。なお「ナコーンラーチャシーマー」という地名は、その付近の古い地名「コーラート」と「セマー」(Sema)を合成したといわれている。

5) 原文においてもローマ字で“Zakuri-Kikai”と音写し、sitting-reel または hand-reel と訳をつけている。

家庭普及促進を説いている。すなわち、日本の明治政府が行なってきたと同じ政策を、タイ政府が実施することにより、「養蚕業は東北タイの偉大な家内工業となり、輸出能力を高め、国家に大いなる富みをもたらす、現国王の御代はいやまに光輝を増すことになろう」[*Loc. cit.*]と説く。明治政府の「殖産興業」策に則り、政府による民間蚕糸業の育成を行い、日本の「生糸貿易基軸体系」[瀧澤 1978: 25]を手本に、生糸によるタイの輸出振興をはかり、富国の道を勧めていたのだった。ヨーロッパ列強の植民地に囲まれた独立国タイを、「東洋に於て完全なる独立と致して其の内政の改良其他の事に就ても益々進歩せしめ」あわせて「間接又は直接に我国の利益になること」[稲垣 1898: 119]を考えていた稲垣にとって、日本人技術者を迎え入れてのタイの養蚕業開発、製糸業振興は、最も望むところであったはずである。

ところで、こうした稲垣らの働きかけに対し、タイ政府側の最大の実力者ダムロン親王は、「生糸は日本の示唆に従って実施すれば、それほど投資をしなくても済むでしょう。まず、月給は多くて300バーツ支給して、調査のための専門家を呼び、それから2家族ほどの日本人専門家を東北タイに、2年間派遣すれば成果が上がるでしょう」[KS. 13/13]と、兄チュラーロンコーン王に報告している。ダムロン親王は、東北タイの養蚕業あるいは養蚕業そのものに対する知識に欠けていたのか、あるいはそれほど期待がなかったのか、おそらくは前者であったと想像されるが、いずれにせよ養蚕業の開発のため投資、経費を極めて低く見積もっていた。このことが日本側の描く見通しと大きく異なり、のちに不幸にも未完の終末を迎える結果となる。

(2) 養蚕開発地域としての東北タイ

日本人専門家を雇い、養蚕開発を行おうと

する東北タイ地方は、19世紀末まで、タイ政府が直接統治する地域ではなかった。19世紀後半、北ラオスのシップソンチュタイで、フランス軍との軍事衝突を繰り返してのち、1892年2月に、王弟ピチットプリーチャーコーン親王 (Phraċhao Bōromwongthoe Kromluang Phichitprichakōn) を初代総督として、南ラオスのチャムパーサックに送り込んで [Mikuson 1974: 39], 直接統治に着手するにおよび、ようやくタイの領土として明瞭に意識されるようになった。19世紀までの東北タイ地方は、コーラートが東北タイからラオスをにらみ、この地方の動静を察知する要衝として、17世紀末に建設された砦を持つ町となり、中央の統治下にあるだけであった。わずかに、東北タイの南部、カンボジア国境をなすドンラック山脈北部に点在するクカン (Khukhan), サンカ (Sangkha), スリン (Surin), ラタナブリー (Rattana-buri) のクメール人の町が、アユタヤー王朝末期から朝貢していたにすぎなかった。18世紀ごろから、メコン河東岸より東北タイ地方に移住してくるラーオ族の人口が次第に増加し、東北タイの各地に城市 (Mŭang) が形成されるようになる [吉川 1977: 76]。したがって、東北タイの住民は、国家への帰属意識など持ちあわせていなかった。1893年東北タイのウボン (Ubon-ratchathani) に赴任した2代目総督サンパシッティプラソン親王 (Phraċhao Bōromwongthoe Kromluang Sanphasitthiprasong) が、この地方で徴税を実施しようとしても、タイ人ではないという理由で容易に支払おうとしなかった [Mikuson 1974: 99]。

この時、タイは国際的に“Siam Crisis”と呼ばれる「暹仏事件」を経て、すでにメコン河東岸のラオス地方をフランスに割譲していた。フランスの次の目標は東北タイであった。パリの新聞 *Le Temps* は、1904年4月12日付の記事で、インドシナ半島の地図を掲げ、フ

ランスが東北タイをその勢力下に置くことを、イギリスが認めた、と報じた。[Chumsai 1976: 6-7]。事実は、この年、英仏両国がタイを緩衝国にするため、委員会を開催する交渉が始められたのであったが [Jeshurun 1977: 119], フランス側の野心を如実に伝えており、東北タイはフランスの関心の的であった。ラオスの次に東北タイを狙うフランスに対し、チュラーロンコーン王は、当初の北部タイへの鉄道敷設を変更して、迅速な兵員の輸送、連絡という政治的、戦略的理由から、まずコーラート線を新設することにした [Weiler 1977: 105-106]。バンコク・コーラート間 265km の鉄道線⁶⁾ は1900年(明治33)に完成した [Krom Sinlapakōn 1968: 117-118]。

コーラート線が完成する前年の1899年にコーラートを視察したダムロン親王は、チュラーロンコーン王への報告書の中で、「コーラ

6) バンコク・コーラート間の鉄道敷設計画は、すでに1890年に発表され、1892年2月にイギリスの会社が工事入札に落札して着手している。その背景を、岩本千綱は「暹羅談」で次のように語っている。「此の如き活潑なる考案計画は、其表面上の名儀は、暹羅国王の英断に出つと雖も、其内部に立入りて、審かに之を窺伺すれば、他無し、皆是れ英国外交委員と其商業社会有力なる企業と、共謀して以て、暹羅国王并に其貴族等を籠絡したるの結果に外ならざる也」と。しかし、チュラーロンコーン王は、ドイツは英仏両国ほどの領土的野心がないと判断して、鉄道局長にドイツ人鉄道技師 Karl Bethge を雇い入れているし、1893年には、工事のまずさから、イギリスの会社との契約を破棄し、鉄道局自ら着手している。この鉄道工事に、岩本千綱の募った日本人移民15人が苦力として雇われ、10人が熱病に罹って現地で死亡、ふたりはバンコクまで出てきて死んだという。第2次世界大戦後、サラブリーに近いケンコーイという町の寺に、その慰霊碑をバンコクの日本人会が建立したが、いまではすっかり忘れられている。皮肉なことに、日本人慰霊碑と並んで、第2次世界大戦中に連合軍の空襲で死亡したタイ人の慰霊碑が建てられていて、その形は黒い爆弾の形をしている。

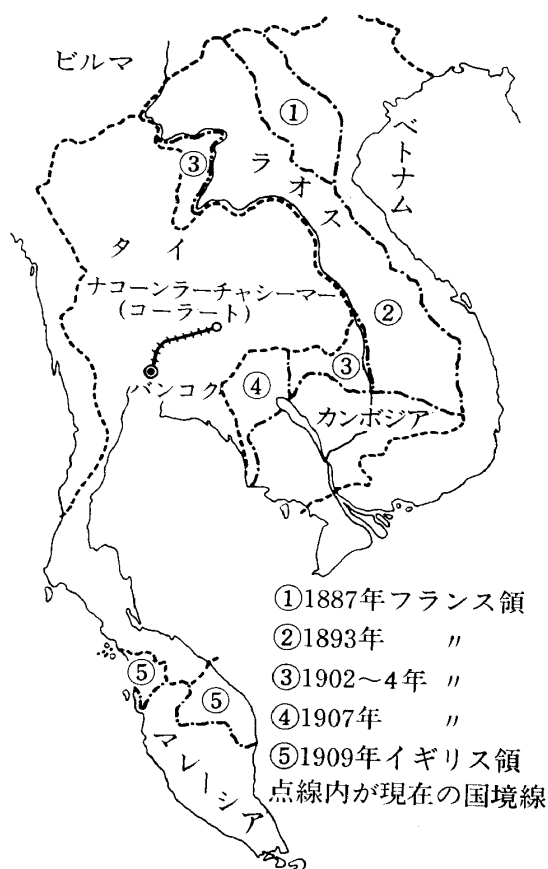


図1 19世紀末～20世紀初頭のタイ領失地図

ートから輸出される商品は、獣皮、角など森林物産がほとんどで、またこれらはメコン河の左岸から送られてくるものである」[*Ibid.*: 169]と述べ、いかにも辺境の感を与える産物しか商品となっておらず、生糸や絹の類はみられなかったのであろう、全く触れられていなかった。さらに、鉄道開通後の変化について述べた1903年(明治36)1月の報告書では、「粳、豚、樹脂、ミカン、タマリンドの実、橄欖、カボック、柿(の一種)、トウモロコシ、水牛肉、木材、石、牛、馬、アヒル、ニワトリ」[*Ibid.*: 173]をコーラットから輸出されている商品として挙げているが、この時にも生糸、絹類はみあたらない。東北タイで自家消費用に営まれている養蚕業に着目したのは、やはり日本人であったといわねばなるまい。19世紀中葉まで、世界の蚕糸業をリード

していたのはフランスであり[石井 1979: 27], そのフランスがメコン河を挟んで指呼の間に席捲してきている折に、養蚕専門家の雇用が、「仏国ノ如キハ其対東亜政策実行ノ好手段トシテ日本ニ代リテ此契約ヲ引受ケルノ挙ニ出ツル事無キヲ保シ難シトノ掛念」を抱いた稲垣は、「コーラット地方ハ多年仏国ノ垂涎スル所ニシテタヒ此地ニ勢力ヲ扶植スルトキハ仏国ノ対東亜策ハ茲ニ確立ヲ見ルヲ得ヘシ」[外務省 3—8—4—16]と思料し、日本外務省へ報告する一方、タイ政府に強力に働きかけていた。稲垣は、「日本が工業上なり其他東洋の均勢上の点に於て、彼国(タイ国、筆者注)の独立を完全にさして行くべく力を尽すことは、日本が東洋に於ける先進国たる天職」[稲垣 1906: 20]であると考えていた。

(3) 「作物局蚕業課」創設の意図

養蚕業振興とはいえ、タイ国の独立維持、富国繁栄のためとする日本側の意図と、タイ側の意図とは、かなり大きな隔たりがみられる。

タイは昔から絹織物の輸入国であった。現王朝初代王ラーマ1世が、中国に朝貢を始めた1782年、タイから中国へ運んだ朝貢物は、1番の象に始まり、沈香、琥珀、宝石、孔雀の羽、鳥、象牙、しょうずく、旃檀等々、森林産物を贈り、中国からは各種絹布類で大部分を占める答礼品を持ち帰っている[Kōng Čhotmai het 1978: 23-25]。綿業や絹業は地方農家の副業として細々と営まれていたが、ほとんどが自家消費用であり、タイ中央部では養蚕業が存在せず、養蚕地帯とは交通の不便もあり、輸入に依存せざるを得なかった[Ingram 1971: 113-114]。養蚕地であるコーラットでさえ、1900年前後には、生糸の輸入を行なっていた[KS. 13/32]。

日本人で最初の養蚕顧問外山亀太郎が、

1902年3月に赴任してきた時、農務大臣チャオプラヤー・テーウェートウォンウィワット (Čhaophraya Thewetwongwiwat) は、「養蚕と製糸を営んでいるのはどの地方であるか、詳細なる資料を送付願いたい」[*Loc. cit.*]とタイの内務省に依頼しているが、内務省からはなかなか資料が送られてこず、いらだちを覚えている。外山の調査を待つ以外、農務省も内務省も、国内の養蚕業や蚕糸業についての実態をほとんど把握していなかったようである。

国内での綿、絹業の状況は、中央政府にはほとんど知られず、輸入は年々伸びていた。例えば、1896年生糸、絹、綿織物の輸入額は、4,886,821バーツであったが、5年後の1901年には、8,921,719バーツと、ほぼ倍額になった。その原因として、「いかなる国であれ、進歩発展の度合が高くなるにつれ、時代に即応した精緻な美しい衣裳がほしくなるものである。毎年、この度合で、シャム国内の絹布や綿布類の消費が増加していくと、20年後にはこれら絹綿布類を各国から少なくとも22,603,683バーツ輸入しなければならなくなる。(中略)そこで、農務省としては、外国より多額の絹や綿布を輸入しなくても済むように、国内の養蚕業と織物業とを育成、発展させることを考えたのである」[Wongsanupraphat 1941: 264]。

絹の持つ光沢と優雅さ、重厚さは、王侯貴族の衣裳とするにふさわしい。輸入した絹布の多くは、バンコクに居住する彼らによって消費されていたのであろう。そうであれば、自己資本により、新技術で自ら生産してみたい、という考えが生じて不思議ではない。東北タイの僻地でも、細々と作っているのであるから。チュラーロンコーン王は王宮内に住む有閑宮女たちを使い、王宮内での養蚕、製糸を行い、絹の生産をはかろうとしていた。予定されているパトゥムワン (Pathumwan)

とは別に、1903年6月、御所の近くのドゥシット (Dusit)⁷⁾に、桑畑を作らせようと調査を外山に命じた [KS. 13/71]。そして、まず宮中に養蚕学校を開校し、1903年11月から宮女たちを集めて、外山らに教えさせている [KS. 13/99]。蚕の飼育は1日に4～5回、桑の葉をきざんで与え、糸繰りや織物製作は手先を使う細かい作業であり、いずれも根気の要る仕事である。王侯貴族の子女たちにはとても向く仕事ではなかった。この試みは約1年間続いただけであった [KS. 13/158]。

タイ側の指導者には、国家に利益をもたらす事業として、養蚕開発を行う意図が伺えるが、国家の独立維持とか、地方の産業開発のためというよりも、むしろ、輸入代替産業として、国内生産を行い、野放途に増え続ける出費を抑え、ついで利益を上げようとする、現実的、功利的な意図が伺われる。⁸⁾

(4) 外山亀太郎の構想

外山は1902年(明治35)3月4日にバンコクに到着するや、翌日、稲垣に伴われて農務大臣チャオプラヤー・テーウェートウォンウィワットを訪問し、ついで農務省顧問 W. A. Graham に伴われて、内務大臣ダムロン親王

- 7) ドゥシット地区には、今日も国王の御所があり、ほかに国会議事堂、動物園などがある。
- 8) 日本の皇室では、絹が五穀のうちのひとつに加えられていたといわれる。貞明皇后が御自身で蚕を飼い、生糸を作って織物にしたという作品が、岡谷市蚕糸博物館に飾られている。タイ王室においても、養蚕業に対する関心が深い。現ラーマ9世プーミポン国王は、南タイ、ホワヒンに桑畑を持ち、蚕を飼って、農家の副業に供されているし、シリキット王妃も、ホワヒンの近くに、国王とは別途に桑畑を作り、旧王族の蚕室で有志とともに養蚕を試みさせた。各々、キングズ・プロジェクト、クィーンズ・プロジェクトと呼んで区別し、前者は農民の養蚕導入の可否を決める参考にさせる性格を持ち、後者は拡大されて事業的な性格を帯びてきている(国際協力事業団 [1978: 148-150] による)。絹の持つ魅力故に、絹と王室との関係はまことに深いようである。

と会見した [KS. 13/13]。その後、早速コーラートの養蚕地域を視察調査し、同年5月にはコーラートの調査報告、1903年度予算案、計画書、養蚕実験に必要な購入予定器具品を提出した [R. 5 KS. 8/1]。

この計画書の中で、外山は日本の農業振興がどのような方法で進められてきたかを説いている。まず、養蚕業がタイにとって最も適した産業であり、適切な方法と人材を得れば大いに改善が可能であり、そのための第1段階は、教育と近代科学の導入であると説く。そして、20年ほど前、日本では西洋科学の成果を農業に生かすため、西洋式の農業学校や専門学校が設立され、西洋で学んだ日本人が教授していたが、西洋の知識は持ちあわせていても、日本の実情についての知識はほとんどないため、数年後には廃校の憂き目にあった。その後、10年前、「農事試験場」システムと呼ばれる新しい方法がとられた。農事試験場では、最新の科学成果が採用され、そこで得られた成果を農民に紹介し、普及させるという方法であった。農事試験場はふたつの機能を持っていた。近代科学の成果がいかに関与つかを農民に教えることと、農業学校のかわりをすること、そのほかに、農作物展示会の開催、肥料、耕作機械、家畜、種子などの共同購入の組織作りであった。日本には54カ所の農事試験場があり、そのうち2カ所は養蚕講習試験場である。各農事試験場には59の支所がある。農科大学は1校、農学校、訓練学校が81校ある。

そして外山は、この日本の方式と同じ農事試験場をタイの地で設置することを要請している。タイで設置する農事試験場の場合も、1. 養蚕業のみならず他の農業部門も対象とし、土壌、肥料、栽培、生物学など、農業に関する科学知識を普及させる、2. 国家の農業に、養蚕業を加え、業績をあげるためには、農園経営方法を確立しなければならない。養

蚕業の発展は民生向上に役立たないはずはない、3. 近代科学の成果を導入すれば、農業生産は飛躍的に増えるだろう。養蚕業のみならず、稲作のような一般の農作物の増収に努力するのが最善の策である。それ故、サパトゥム⁹⁾の養蚕試験場も農事試験場に再編されることを要望している。

養蚕業については、1. サパトゥムと同じ蚕飼育場をコーラートに建設し、桑畑を作る。サパトゥムで1年間の学習を終えた卒業生は、コーラートで蚕飼育に従事しながら、実習生に1～2カ月の講習を行い、桑栽培、蚕飼育に関する巡回指導を行う。繭は政府が買い上げ、自由取引は禁止する、2. 繰糸機械100台を備えた製糸場をコーラートに設置し、製糸技術の良さ、商品化の可能性を一般に知らせ、実習訓練を行う。さらに政府収入を見込み、農民の繭増産を奨励する。いずれも日本で行われてきた方法である。従来、農事行政に関して全く経験のないタイ側では、外山の意見、構想に従うほかはないが、サパトゥムの農事試験場案では、外山自身、養蚕以外にはあまり関心はなく、養蚕試験場となる。製糸場については、人口の多いバンコクに設置せよと主張する大蔵大臣マヒット親王 (Krommamün Mahitratchaharithai) の反対にあったが、ダムロン親王の賛成を得て受け容れられた。外山の計画は、1903年(明治36)6月23日になってようやくチュラーロンコーン王の裁可が得られた [R. 5 KS. 8/1]。ここに、明治政府の農事行政を色濃く反映させた外山の構想が、タイの地で実行に移されることになった。

9) 先のパトゥムワンと同じ場所を指す。今日の場所というと、チュラーロンコーン大学を含む、かなり広い地区であるが、養蚕試験場が設置されたのは、サーラーデーンの北側、チュラーロンコーン病院の敷地にあたる。当時もすでに北側は競馬場があり、その南側に桑畑も作られた。

(5) 蚕業局の体制

1902年3月に外山が到着して以来、現地調査、新部局開設のための計画が着々と進められ、同年9月には日本人技術者一行、横田兵之助、三島敏行、高野与祖次郎、細谷善助、国分セイ、平野キクの5人の到着で、いよいよ実現されることになった。同年9月19日には蚕業課 (Kǒng Chang Mai) 用農務省規則が作成され、外山はその課長 (Huana Phu Pokkhrǒng) となり、部下を統率して命令指揮する権限と責任を持たされた [KS. 13/63]。それとともに、月例報告が義務づけられた。10月末には、外山は横田、細谷を連れ、コーラート、ウボンの調査に出かけ、蚕の飼育実験第2回目は、バンコクでは桑葉が少なく不足がちなため、コーラートで行うと報告した。コーラートでの実験は横田と高野のふたりが11月より行うことになった [KS. 13/38]。

ちょうどそのころ、イギリスで農学を学んでいたチュラーロンコーン王の38番目の王子ペンパタナポン親王¹⁰⁾ (Phračhao Lukyathoe Phra Ong Čhao Phenphatthanaphong, 以下「ペン親王」と略称する) が帰国し、1902年12月に外山らとコーラートを視察、翌年1月にその視察報告を国王に提出した。養蚕の部局は、他の農作物、畜産とをあわせた部局と

10) 1883年9月10日生まれであるから、局長に就任した時は、やっと20歳になったばかりの若さであった。1908年にクロマムーン・ピチャイマヒンタロードム (Krommamūn Pichaimahintharodom) の尊号を下賜されたが、1909年11月11日に病死した。享年26歳。ペン親王がイギリス留学中、その監督官チャオプラヤー・プラサデットスレンタラーティボディー (Čhaophraya Phrasadetsurentharathibōdi) に宛てたチュラーロンコーン王の書簡には、しばしばペン親王の名が挙げられており、王が気にかけていた王子であったことが伺われる。帰国後、早速コーラートを視察して書いたペン親王の報告書に、チュラーロンコーン王は自筆メモを農務大臣に届け、我が子の報告書の一読を勧めている。立派に成長した我が子に安堵した気持ちが、十分読み取れるメモである。

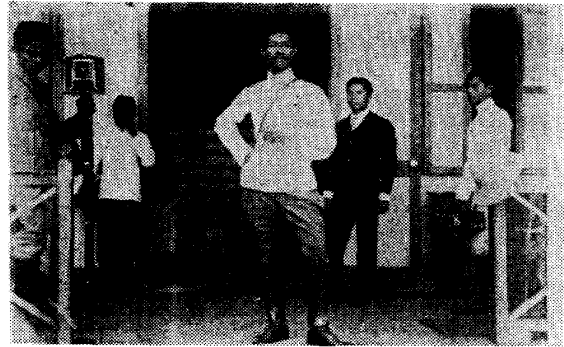


写真1 ペンパタナポン親王。コーラート養蚕試験場にて、視察の折に写したものであろう。

する方が予算の節約になる、局長にはタイの王族を迎えるのがふさわしいという外山の意見具申で [R. 5 KS. 8/1], 1903年10月に作物局 (Krom Phōpluk) が誕生し、ペン親王が局長となった [R. 5 KS. 10/3]。もっとも農務省次官との兼任であり、専任となるのは1904年10月で、作物局局长 (Athibōdi Krom Phōpluk) として月給800バーツが支給されることになった [KS. 13/173]。蚕業局 (Krom Chang Mai) という呼称は、ペン親王が局長に就任して以来、ペン親王がそう呼び、その名称で報告書、公文書を書いていた。ペン親王の死亡で、局長が交代すると、再び作物局という名称を使うようになる。ただし、農務省では、1906年に「蚕業局」より「作物局」へ名称の変更があったとする [Krasuang 1966: 96]。

外山が先に提出した計画書では、日本人6人の雇用を申請していた [R. 5 KS. 8/1]。5人は到着済みであったが、あとひとり外山の教え子、中村辰治を台湾省殖産局から呼び寄せて、蚕業局の陣容は整った (表1)。

外山が先に提出した計画書に従い、タイ側はそうのように予算を見積った [Loc. cit.] (表2)。

この予算案は、マヒット親王やダムロン親王の許可を得て、実行に移された。試験場建設や器具類にあてた金額は、両年度あわせて

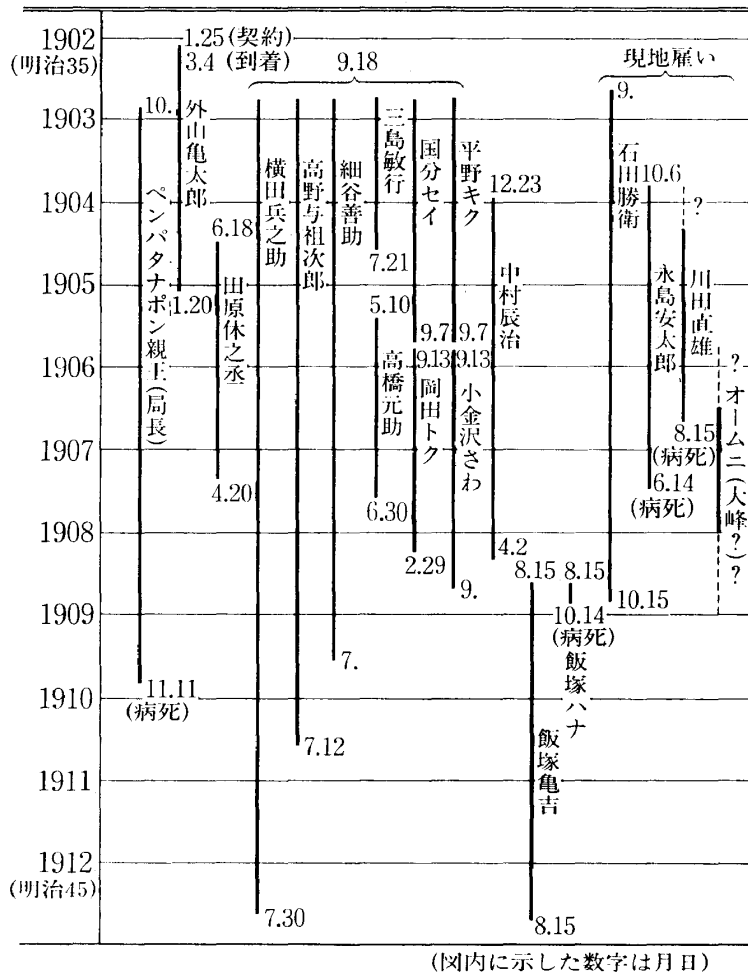


図2 初代蚕業局長および日本人職員在勤期間

表 1

氏名	地位	専門分野	月給(バーツ)	
			初年度	1903年7月
ペン親王	局長	農学	—	—
外山亀太郎	技師長	養蚕飼育	500	?
横田兵之助	主任技師	〃	300	450
三島敏行	技師	桑樹栽培	240	350
高野与祖次郎	〃	桑樹防疫	200	300
細谷善助	〃	製糸	200	300
国分セイ	工女	〃	100	?
平野キク	〃	〃	100	?
中村辰治	技師	桑樹栽培	—	300
石田勝衛	現地雇い	通訳	120	?
永島安太郎	〃	〃	—	100

約42万バーツであった。1904年度58,604バーツ(経常費28,604バーツ, 臨時費30,000バーツ), 1905年度46,480バーツ(経常費38,280バーツ, 臨時費8,200バーツ)と、実際には第2年度に見積ったような人件費は費消されていないものの、その後も支所の増設などで、臨時費の出費が続いており、当初の2年間を除き、各年度とも経常費, 臨時費を6万バーツとして、日本人が勤務していた10年間では、およそ100万バーツほどの金額が費やされていたことになる。

職員の構成は、日本や台湾から派遣された日本人職員以外に、現地バンコクで雇われた日本人もいた。永島安太郎, 石田勝衛, 川田直雄, オームニ(大峰?)らである。彼らはバンコク居住者で、タイ語会話が可能であるところから、最初は通訳として雇われていたが、永島は外山や高野を補佐し、石田は横田や細谷を補佐し、その助手の役割をするようになる。

石田にいたっては、のちにブリーラム(Buriram)支所の所長の任にあたるが、給料は日本から派遣された日本人の約半分であった。無契約での雇用であるため、年1カ月の有給休暇ももらえず、川田は1906年8月に病死し、永島は1907年6月14日に任地、東北タイのブリーラムで病死している[KS. 13/221]。

外山の計画に沿って、パトゥムワンでの蚕の交配実験は、外山と高野, 永島, タイ人セーン(Seng)が担当し、桑栽培は三島, 中村, タイ人チャルーン(Čharoen)が担当した。コーラートの方は、横田, 細谷, 石田が担当した。平野, 国分らの女性については、タイ側文書にほとんど言及はないが、バンコクの

表 2

初年度（1902年4月～1903年3月）		
經常費	人件費	バーツ
	蚕業技師長	6,000
	第1助手 @313×10ヵ月分	3,130
	第2助手 @209×10ヵ月分×3人	6,270
	第3助手 @125×10ヵ月分×2人	2,500
	実習生 @15×10ヵ月分×6人	900
	用務員 @20×10ヵ月分×2人	400
	桑畑作業員 @20×10ヵ月分×6人	1,200
	通 訳 @120×10ヵ月分	1,200
	2級事務員	420
		小計 22,020
	諸経費	バーツ
	技師長宿舍借上費	770
	文具事務用品代	500
	旅 費	3,000
		小計 4,270
臨時費		バーツ
	試験場、職員宿舍	20,000
	蚕飼育用器具	4,170
	蚕病検査用器具	1,670
	顕微鏡、付属品	1,670
	動力計	840
	重力計	1,340
	製糸撚糸機	4,170
	繭煮沸釜	500
	薬品購入費	3,340
	外山他日本人渡航費	2,934
	桑畑用土地購入費	13,200
	整地費	5,148
	道路敷設費	11,603
	桑樹苗購入費	1,000
		小計 71,585
		総計 97,875
第2年度（1903年4月～1904年3月）		
經常費	人件費（局長給与を計上）	バーツ 64,630
	諸経費	22,770
臨時費	コーラートの桑畑、養蚕試験場	85,500
	コーラート製糸場	76,400
	パトゥムワンの諸器具追加購入費	72,000
		総計 321,300

パトゥムワンや王宮内で製糸技術を教えていた様子である。

外山が計画を立案した時、ダムロン親王はナコーンチャイシー (Nakhōn Chaisi) にも支所を設けることを提案している [R. 5 KS. 8/1]。その理由として、コーラートでは古来の方法によって養蚕を営んでおり、新しい方法を教えることは住民の性癖をねじまげることになり、容易に成功するとは思えない。ナコーンチャイシーでは、住民に養蚕の経験がなく、蚕飼育は単純作業であるから、住民はすぐにまねて始めるであろう、ナコーンチャイシーで成果を上げれば、次々と各地に拡げていくことも可能である、というものであった。この提案によるのであろうか、横田が1903年10月にプラバトム支所の責任者に任命されているが [KS. 13/158]、その後の報告にないところによれば、実施にはいたらなかったようである。

1905年に外山が帰国し、田原休之丞が赴任

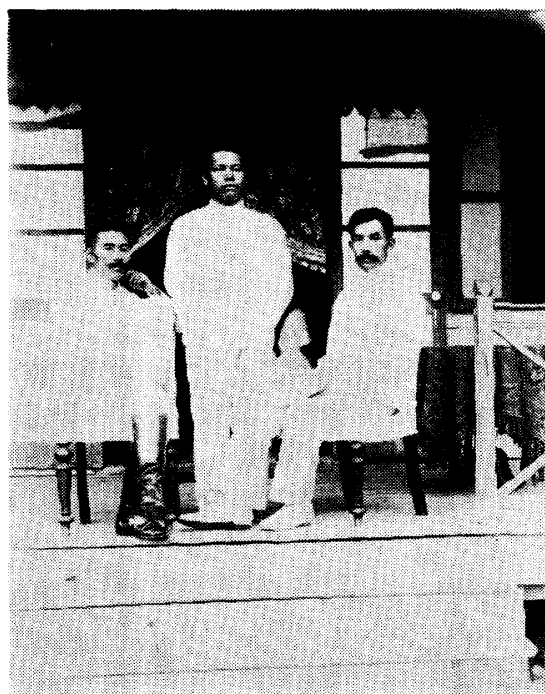


写真2 左より、横田、中村、細谷。コーラート養蚕試験場にて。

してからの体制は、次のようにかわった。

蚕業局バンコク課 蚕種改良係長

田原, 高野

学校係

養蚕学教師 田原

科学と農学

モームラーチャウォン・ト

(Mömratchawong To)

養蚕学 高野

桑栽培学 中村

コーラート課長 細谷, 中村

ブリーラム課長 横田, 石田, 永島

この体制は、養蚕学校が卒業生を送り出すようになると、卒業生が日本人職員の帰国したあとを継ぐようになる。

(6) 風土病と給料

勝手違った国に勤務する日本人にとって、離職の原因として挙げれば、風土病と給料ということになる。まず外山が1904年1月から4月まで、病気で休職しており [Loc. cit.], その後も健康がすぐれず、契約3年が満期になると帰国してしまった。かわって田原が同年6月に給料月額800バーツの契約で到着した。田原の場合、外山のように全ての業務を指揮監督するのではなく、養蚕学校の教授 (Achan) として雇われている [KS. 13/166]。契約期間を残して、最初に帰国したのは三島であった。三島の場合も病気であった。三島にかわって高橋元助が渡タイし、月給350バーツの契約で蚕の飼育、品種改良を手がけるが、高野との折り合いが悪く、しかも病気がちであるため、2年契約の期間が終ると帰国してしまう [KS. 13/171]。

平野キクは、1905年6月に結婚のため帰国を申し出た [KS. 13/198]。平野はタイ語を学びよく話せたので、タイ側は退職を残念がり、慰留に努めたが、平野は9月に帰国した。その際、国分も一緒に帰国した模様である。

このふたりの女子職員の場合、契約がなかったためタイ側は帰国旅費を出し渋っていたが、結局250バーツを支給して、ふたりはやっと帰国が可能になった。ふたりの後任として岡田トク、小金沢さわの女子ふたりが渡タイした。岡田はコーラートで製糸技術を教える教師として、月給195バーツ、2年の契約を行なった [Loc. cit.]。小金沢の方は月給100バーツで1年契約であった。その差は、岡田が上級学校卒業、小金沢が中級学校卒業という、学歴の差によったらしい。小金沢は1年



写真3 岡田とその教え子たち。コーラート養蚕試験場にて。背景の建物は製糸場であろうか。

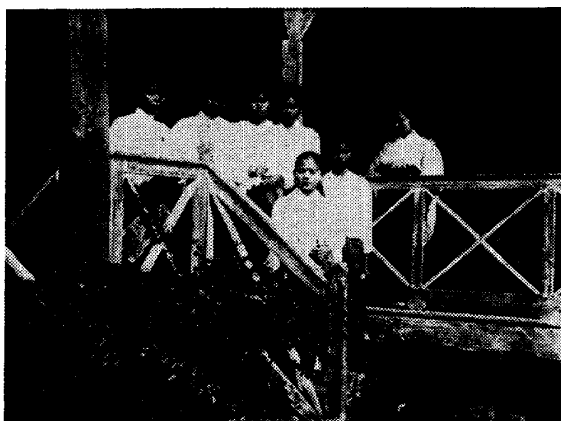


写真4 小金沢とその教え子たち。日本髪に対しタイ人女性の断髪のような髪型は伝統的スタイル。バンコクの良家の子女であろう、顔立ち良く、服装もしゃれている。

後の契約更新の際、25パーツ昇給して125パーツにすることが認められている [KS. 13/208]。岡田、小金沢が2年間の勤務が終り、契約の更新となって、再び昇給が問題となった。タイ側は、岡田に5パーツ、小金沢に25パーツの昇給を許可しようとしたが、日本側は、岡田の努力に報いるためにも、昇給額を小金沢と同額の25パーツにしてほしい、5パーツ程度の昇給では、おそらく帰国してしまうだろう、と要請するが、認められなかった [Loc. cit.]。それがためか、小金沢はさらに1年勤務することになるが、岡田は翌1908年2月に、健康がすぐれないという理由で帰国してしまった [KS. 13/124]。小金沢はバンコク勤務、岡田はコーラート勤務と、勤務地が異なり、小金沢はタイ側の上司たちとしばしば接して、そのタイ語会話能力が評価され、親しみが持たれていたが、岡田は僻地にあって、タイ側にはほとんど知られていなかったことが、タイ側の評価に響いたようである。

昇給の問題は、契約もなく、低給料を受けていた現地雇いの日本人には深刻であった。1907年1月、東北タイのグリーンラムで勤務する石田、永島の給料を100パーツ昇給して、石田に350パーツ、永島に250パーツを支払うよう、横田が農務省に要請した。その理由として、石田はすでに3年間勤務しているが、その間、1回も昇給の機会がなかったことと、石田に退職されると、東北タイでの製糸改良事業に支障をきたすことを挙げた [KS. 13/208]。タイ側は、兩人には60パーツの僻地手当を支払っているので、昇給は不要と拒否した。また同年3月、バンコクで高野の助手として働くオームニ（大峰か？）に、昇給額100パーツで月給250パーツの支給を要請するが、これも拒否された。石田もオームニも、昇給が認められなければ退職すると、辞意を表わしており、オームニは昇給が拒否されるや退職して、タムボン・クローンランサリットに

ある自分の田畑を耕しに去っていった。石田は1908年10月に退職、永島は不幸にも昇給が認められぬまま、1907年6月14日、辺境の町グリーンラムで病死した。3年余りも、昇給もなく、有給休暇もなく、横田の不在の時にはその代理となって勤務した永島に対し、横田やタイ側の局長代理モームラーチャウォン・トの要請で、ようやく月給3カ月分の弔慰金が遺族に贈られることになった。

蚕種の品種改良により、日本の場合とほとんどかわらないほどの生糸が生産できるようになり [KS. 13/256]、次は織物の改良に着手しようとして、1908年8月、織物の専門家飯塚亀吉、飯塚ハナの父娘が、2年契約、月給200パーツと150パーツで雇われ、コーラートに勤務することになった。しかし、飯塚ハナは到着して間もなくコーラートにて病死した。¹¹⁾ 飯塚亀吉は横田とともに最後まで残ることになる。

日本人職員たちとの契約では、年間有給休暇が最初のころは2カ月、のちに1カ月となった。数年分の有給休暇を集中して使う場合、何カ月分以内という契約条項はなかったので、日本人は有給休暇分を後日に残しておいて働き続けた。そして退職して帰国する際に、有給休暇分の給料を受け取ってタイを離れる、という方法をとっていた。いいかえれば、契約期限が終ってから、日本で有給休暇をとるということになる。このことがタイ側

11) 飯塚ハナの死亡年月日、亀吉との間柄、出身地（群馬県桐生市）については、バンコク市内ラーチャブーラナ寺（通称ワット・リエブ）の日本人納骨堂に保存されている過去帳によった。この過去帳は、明治28年の移民で、ケーンコーイの鉄道建設で死亡した人々より始まる。また「水島安太郎 明治40年8月3日 シャム内地旅行」で死亡したことになっているが、「水島」は「永島」の誤りであろう。タイ側の資料と死亡月日が異なるし、旅行中というよりも勤務中である。過去帳に掲載されている死亡者の死因のほとんどは、コレラ、赤痢、脳膜炎、腸チフス、肺結核などの伝染病である。

には余分な給料を支払っているかの印象を与えたのであろう。有給休暇分の給料がなかなか支給されず、帰国予定者は有給休暇分の給料を受け取るまで、無為のうちに過ごすことがしばしばあった。例えば、高橋は1905年5月10日に契約し、2年後の1907年5月9日に契約切れとなる。契約期限の3カ月前に、契約更新を行わない旨通知し、6月25日に有給休暇2カ月分700バーツと帰国旅費400バーツを請求し、6月30日に退職するが、ようやく支給されるのは3カ月後の9月23日であった[KS. 13/128]。中村の場合は、1908年4月2日に退職し、4年間の有給休暇4カ月分として1,600バーツと帰国旅費を請求するが、支給されたのは2カ月後の5月30日であった[KS. 13/130]。横田の場合、1908年7月に契約が切れ、さらに2年の契約更新を行なった。新規契約の2年目からは、月給550バーツを600バーツに昇給させるということで、翌年2月により契約が成立した。契約は1908年7月にさかのぼってであった。ところが、1909年7月から600バーツ支払われることになっているにもかかわらず、契約通り支払われないので、契約履行を促すが、1910年12月になっても元の550バーツしか支払われていない。横田は次第にいらだちを覚え、8月には農務次官に強く要請し、12月には農務省会計局長に、契約不履行の理由を大蔵省に問いあわせるよう依頼した。逆に大蔵省は、2年目から横田の月給を昇給させる理由がわからぬと問い返してきた。農務省は、横田の永年にわたる勤務とその業績に対して適当であると回答した。大蔵省からは9月19日付で検討中との返事が戻ってきたが、契約期間はすでに過ぎていた。そして、1911年1月9日になってようやく、1909年7月12日から1911年2月末日までの差額583バーツが支払われることになった[KS. 13/282]。支払うことになった理由は、ペン親王が交わした契約に違

反するのは不名誉であるからというものであった。横田の昇給が妥当であるとしたペン親王は、1909年11月11日に逝去していた。そして1910年10月23日にはペン親王の父チュラーロンコーン王も世を去っていた。職員ひとりのわずか50バーツの昇給に、なぜ2年近くも悶着が続いたのか。最大の理解者ペン親王の死と、御世の交代というタイ政府の大変動があったからであろうか。ささやかな事件ではあったが、タイ国に大きな時代の変化が訪れ、蚕業局もその埒外にいらなくなる時期の近いことを示唆する内容を含んでいた。

このように、日本人技師たちの離職は、疾病に起因するか、昇給、契約にまつわるトラブルによることが多く、気候風土の違い、社会システムの違いから、ひとりふたりと離れていった。

Ⅲ 蚕種改良と新技術の移入

(1) 蚕の品種改良

東北タイ地方で飼育されていた蚕については、外山が1902年4月に提出した最初の報告書の中で、多化性の黄繭種で、広東マユかヤママユに近く、こうした野性種では良質の生糸を生産することは困難であり、品種改良を行わねばならない、と説いた[R. 5 KS. 8/1]。同年12月に外山とコーラートを視察旅行したペン親王も、繭が不揃い、さわると軟らかく、糸が少ない、ひとつの繭からとれる糸は外側の太くて粗い部分が多く、また繭に穴があいていて、糸がこま切れになっていると述べ[KS. 13/37]、およそ商品になりにくい品種であった。そのせいか、昔から営まれていたこの地方の養蚕業が、近年サイゴンから流入する生糸に押されて、次第に衰退する傾向さえ出てきた[*Loc. cit.*]。そこで外山は日本の蚕種を持ち込み、1903年初めより、タイ種と日本種との交配実験を開始した。タイでは年間

約8回も孵化が可能であったが、4代雑種まで生産し終えて、外山はその後病気になり、引き続き実験する者もいなかったため、蚕種は全て死滅してしまった[R. 5 KS. 8/2]。良質の交雑種がそのまま続いて生産できるのか、あるいは先祖帰りしてしまうのかはわからなかった。日本種との交配は、外山の帰国後、田原の指揮で、1905年2月から再び試みられた[KS. 13/143]。交雑種が同年11月までの間に、1代雑種から6代雑種まで作られた。1代雑種には、タイ種はもちろん日本種よりも優れた糸のとれる好結果が出た。また、濃いクリーム色の繭を作る交雑種が最も多くの糸を作ることがわかり、次に多いのは薄いクリーム色の交雑種であった。薄いクリーム色の蚕種の方が安定して次々と代を重ねることがわかり、この蚕種をコーラートで増産し、農家に配布することになった。在来純タイ種では交雑種にはるかに劣ることが判明した[R. 5 KS. 8/2]。しかし、日本種は一化性であるため、年に1回しか孵化せず、そのつど、日本より輸入しなければならない不便さがあった。また、蟻に食われたり、寄生蠅に卵を産みつけられたり、微粒子病にかかったりして、改良種を生み出すことはなかなか困難な作業であった。特に Pebrine 病は、急速に伝染する恐ろしい蚕病であり、わずか1日でたくさんの蚕が死んでしまった。この Pebrine 病は、外山の調査ではコーラート付近では見出せず、日本では多発する病気であった点から、日本の蚕種を持ち込んで以来、バンコクの試験場で流行し出した蚕病であった[KS. 13/158]。1905年11月に日本から3回目の蚕種輸入を行い、8代まで交雑種を生産した。その結果、濃いクリーム色の繭と白色の繭に糸が多く、純タイ種よりも倍以上もとれた。また淡クリーム色が親の色、性質をよく保存して遺伝していることがわかった。また、8代にわたり交雑してわかったことは、交雑種が多化

性になったことである。そしてこれらの蚕種は全てコーラートに送られ、バンコクには、さらに日本種と交配するための分が少量保存された。しかし、こうした努力にもかかわらず、コーラートで飼育されるようになった蚕種は、バンコクからのもの、ブリーラムからとってきたもの、全て混ぜあわせられ、要するに無菌の種を選んで、繭へと飼育された[KS. 13/546]。貧弱な施設のうえ、技術者不足のため、良品種を他種から隔離して増産することが困難であったのだろう。1911年ごろには、飼育されている蚕は全てタイ種に戻ってしまい、日本種は消滅してしまった。蚕種配布に関しては、蚕種が無菌であるかどうかを検査して、一部は試験場で飼育して繭を生産し、一部を住民に配布するのがコーラートの試験場での業務となった。

外山は、蚕種、繭、桑葉など、タイでの調査や実験結果を、いくつかの詳細な報告として残しているし、世界の養蚕業の動向を述べた論文も残している。外山の最後の報告書となったのは、一化性日本蚕種と多化性タイ蚕種との4代にわたる交配実験の結果報告である。この報告書は1905年2月10日付でペン親王を通じ農務大臣に提出された。外山の報告書は英文により、タイ語訳が付されているのが常であったが、この報告書はタイ語訳だけが残されている。英文の方は外山が持ち帰ったのであろうか。タイでの交配実験は、遺伝学者外山にとっては、最も関心の深い内容であったであろう。外山が蚕の遺伝に関する論文を初めて発表するのは、帰国した翌年1906年(明治39)であった。これはメンデルによる遺伝法則の再発見からわずかに6年後のことであった[町田 1940:2]。この論文は外山がバンコクの養蚕試験場で行なった研究の結果である[同所]。そして、1909年(明治42)に著わした『蚕種論』で、蚕の1代雑種が有利であることを説き、1代雑種飼育を推奨し

た [同上論文：7]。外山は蚕の遺伝に関する研究により、1915年（大正4）、学士院賞を受け、また蚕の1代雑種発明に対して、1933年（昭和8）帝国発明協会より恩賜記念賞を受けた。

蚕の1代雑種が繭生産に有利であるという外山の説は、1914年（大正3）、長野県松本市で具体的に実行に移され、県立原蚕種製造所や大手製糸会社片倉組によって普及されていった。同年10月には、「大日本一代交配蚕種普及団」が松本市で組織された [加藤 1928：36]。1927年（昭和2）には日本における1交代雑種の普及率は9割に達し、明治末期と大正末期とでは、収繭率は2倍以上に増えた [同上書：84]。そして、昭和初期には、生糸絹織物の輸出額が日本の総輸出額の4割4分を占めるにいたった。

およそ色合いといい、形状といい、また多化性と一化性という全く異なる品種を、短時日のうちに数回交配することが可能という、願ってもない場を得て、外山がバンコクで行なった実験の結果が、日本の生糸生産に長足の進歩を促したといえることができる。

(2) タイ人専門家の養成

先に述べたごとく、外山らによる最初の学校は1903年7月16日に、王宮内に開設されることになった。しかし、予算措置の遅れからか、第1期として、同年11月末から翌年3月までの約4カ月間となった [KS. 13/99]。教科目は桑樹栽培、蚕の飼育法、繭の保存、繰糸法など、養蚕と蚕糸技術に関する授業で、午前中は授業、午後からはその実習であった。教師として、外山、細谷、平野が担当したが、このころ、すでに外山は疾病に罹り、かわって高野が教えた。最初の受講生は16人で、全員、宮中で生活する女性であった。農務次官の娘も志願していたというから、良家の子女ばかりであったのだろう。入学後の16人は、

2月以降の実習では11人に減り、1904年12月には廃止された [KS. 13/158]。

王宮内の学校とは別に、学校を設立する目的は、外山の意図したような科学知識の普及という点からだけではなく、蚕業局の事業拡大に、日本人職員を次々と雇うようでは国の財源の浪費になるから、日本人職員にかわるタイ人職員を養成する主旨を持っていた [R. 5 KS. 8/2]。新しい養蚕学校は、パトゥムワンに事務所、寄宿舎が建設されたのち、1905年1月16日に開校した。学級、定員、教科目などは表3のようになっていた。

卒業生は5年間政府機関で有給にて勤務する義務を有し、そうでない者は受給した金額を返還することになった [Loc. cit.]。ところが、初級クラスはバンコクでは不必要、むしろコーラートで大規模に教える方が良いということになった [KS. 13/158]。初級コースをバンコクで教えても、コーラートに行く者はなく、コーラートの住民を集めて初級コースを学ばせる方が良いという考えである。結局、まず上級コースに13人の学生が入学し、製糸についてふたりの女子実習を受け容れた。開校した養蚕学校は、夜明けから夜9時まで蚕の飼育にあたり、その上、教科目の授業に出席するという、盛りだくさんで厳しい時間割であったため、しばしば休暇を設けねばならなかった。教科目は、養蚕学や農学に加えて、代数、幾何、三角法、立体測定法、地理、

表 3

	定員	資 格	修業 年数	教科目	給付金 (単位 バーツ)
上 級	10	14~18歳 または中学卒	2	養蚕学, 農学, 数 学	20
初級(男)	25	17~20歳 読み書き能力 あれば良い		農 学	18
(女)	25	特になし		繰糸法, 蚕飼育法	18

英語、ドイツ語を教えることになった。卒業生をヨーロッパ留学に送り出す予備校の役割を果たすためであった。9科目も教える養蚕学校は、他の農務省の運河局や地図局の学校より水準の高い教科目を教えていることになり、運河局よりふたり、地図局よりひとり、学生を委託してくるようになった[R. 5 KS. 8/2]。1906年には、さらに生物学、化学が加えられ、学校名も「農学校」(Rongrian Phōpluk)と改称した[Wongsanupraphat 1941: 189]。学生数は、1907年で蚕業局15人、運河局10人、地図局ひとりの計26人、聴講生ひとり、学年も初、中、上の3学級に分かれ、各8、10、8人の在学生在がいた。そして1908年初めには、蚕業局の給費学生7人が卒業し、東北タイの各蚕業試験場の支所長、副支所長に任命されて、契約満期となった日本人の業務を引き継ぐようになった[KS. 13/256]。ところが、1908年10月に蚕業局の事務所が農務省庁舎に統合されたのに伴い、農学校は同じくパトゥムワン北地区にあった地図局の学校に合併された。また、養蚕試験場はコーラートに統合され[Wongsanupraphat 1941: 282]、パトゥムワンの土地は翌年3月に大蔵省に売却されて[KS. 13/39]、バンコクの蚕業局は事実上消滅してしまい、コーラート、ブリーラムがその主力となった。

この農学校は、運河局の学校とも統合し、「農務省学校」(Rongrian Krasuang Kasetrathikan)と呼ばれた[Wongsanupraphat 1941: 190]。農務省学校設立に尽力したのは、養蚕学校設立以来のペン親王であった。そして、この農務省学校が発展して、今日の総合大学「カセートサート大学」¹²⁾(Mahawitthayalai Kasetsat)となるのである。

養蚕学校、農学校の卒業生は、ドイツやア

12) 1943年に大学に昇格し、1959年に農務省から総理府へ移管された。今日では農、林、水産などの学部のみならず、社会科学、人文科学系の学部をも有する総合大学になっている。

メリカへ留学する者、農務省に奉職する者、いずれものちに農務省幹部となったが、とりわけ、ポーン氏(Phōng)やプーム氏(Phoem)は、ブリーラムに赴任し、横田の下で勤務したあと、ポーン氏はプラーヤ・アーン・ハーノン・リラック(Phraya Ahanbōrirak)、プーム氏はルワン・サンコーサイパット(Luang Sankosaiphath)、また、コーラートに勤務したチューム氏(Čhoem)はプラーヤ・カシプーミピタック(Phraya Kasiphumiphithak)の爵位と欽賜名を授かり、農務省の高官として活躍するようになる[Ibid.: 245]。

一方、コーラートの方でも蚕の飼育を学ぶため、37人の初級コースの実習生が入学するが、1905年中に20人が素行不良で放校されている。この年は半年で1,975 kgの繭を生産した[KS. 13/225]。1906年には製糸場も設置され、繰糸技術を実習する学生も受け入れ始めた。1908年度には、実習生により、繭1,301,686 gから、生糸50,793 gを生産した。繭1 kgあたり生糸39 gを生産したことになり、当時のコーラートでは普通1 kgあたり19 g程度であったといわれているから、生産率は非常に高くなった。横田の報告によるコーラートでの実習生受け容れと、その成績を、表にすれば次のようになる[KS. 13/351]。

表 4

年度	入学者		卒業生		繭収穫高 (g)	生糸生産 高 (g)
	男	女	男	女		
1905	25	12	2	0	1,975,237	7,134
1906	0	28	16	8	1,537,357	36,356
1907	1	68	1	7	2,782,149	80,350
1908	9	62	5	40	1,301,686	50,793
1909	{ *2 28 *5					

* 織物実習生 ** 蚕飼育、製糸実習生

(1908年度には蚕種を2回住民に配布し、絹織物の製作を開始し、98枚を生産した。1909年は織物と蚕飼育製糸とを区別して受け容れた。なお、繭の収穫量が少ないのに、生糸の生産量が多いのは、農民から繭を買い上げていたとも考えられる。)

コーラートの場合、1910年からは、応募者は小学校4年の課程を終了した者か、それと同等の学力を有する者となり、郡が保証する者に限られるようになった。終了すれば出身の郡で勤務することが義務づけられた。1910年の在學生は17人、教科目は桑園栽培、蚕飼育、製糸、農学と織物の2学科に分けられた[KS. 13/546]。織物を習う女子実習生は年間通じて32人いた。給付金として、ひとりあたり6～12バーツがその勤勉さに応じて支給された。

グリーンラムの方は、1906年に事務所、蚕飼育場、製糸場、繭保存庫、桑葉貯蔵庫、寄宿舎が建設された[KS. 13/351]。

グリーンラムにおける実習生受け容れとその成績は表5のようになる。

表 5

年度	入学者		卒業者		繭収穫高 (g)	生糸生産 高 (g)
	男	女	男	女		
1906	4	25	1	0		
1907	3	30	1	4	2,171,398	115,598
1908	3	12	4	10	1,718,985	80,235
1909	1	5	7	17		

横田は、1909年に、日本の農科大学、農学校、養蚕学校、農事試験場について、国公立に分けて詳しい数字を挙げ、毎年、国や地方自治体がそれに投資する金額は莫大であり、その結果、日本は生糸、絹の輸出国になり得たのだと、教育機関の拡大、科学知識の普及を説いているが[Loc. cit.]、タイ政府は逆に、養蚕業振興に投資したほどには、国家の収入につながらないという見地から、地方産業は地方の政府出先機関の権限に委ねようとしていた。

(3) 蚕糸技術の普及

バンコクのパトゥムワンでは、もっぱら蚕種の改良と専門家養成にあたることになった

が、東北タイのコーラートでは、桑樹の生長にともない、蚕の大量飼育が可能になり、1904年9月より繭の生産を手がけるようになった。外山が最初に意図したのは、蚕種の改良のみならず、製糸、織物の技術改良であったから、住民の実習の場となり、知識普及の場となる模範製糸場が必要であった。そして、設置場所は、もちろん養蚕業の盛んなコーラートという意見を具申ししていた。ところがタイ側、特に大蔵大臣マヒット親王は、コーラートは人口稀薄であるから、バンコクに設置すべきであると主張した[R. 5 KS. 8/1]。日本側は、住民の技術向上、所得増のために、コーラートを選んだが、タイ側は、先行投資の回収、国家の財源確保を考えれば、辺鄙な地方に設置する必要なしとし、設置場所は未定のままとなった。その後、外山と交代した田原は、ペン親王の意見聴取に応じて、1. 繭の集積が容易である、2. 水質が清澄である、3. 低賃金の女子労働者を得易いという製糸場設置のための3条件を示した[KS. 13/158]。ペン親王自身は、養蚕、蚕糸業はフランスで盛んであること、コーラートは仏領インドシナに近いという政治的な配慮で、むしろバンコクに設置した方が良いという意向であったが[Loc. cit.]、専門家があげる3条件からい



写真5 コーラート養蚕試験場事務所(右)と
付属建物(左)

えば、バンコクよりもコーラートの方が優れていることを認めた。結局、専門家である日本側の意見が容れられ、1905年によくコーラートに設置された。だが、技術的な条件や、地方住民を重視する立場と、中央政府の利益を重視する立場との相違は、蚕業局の存廃を決定づける重大な意味を持っていた。

1905年5月より、細谷がコーラートの所長となり、繰糸法を講習することになった。コーラート養蚕試験場設立に尽力した横田¹³⁾は、さらに南のカンボジア国境に近いブリーラムに、新しく試験場設立のために赴き、まず桑園作りから始めた[R. 5 KS. 8/2]。

コーラートでは、1905年9月より、12人の女子実習生を受け容れて、繰糸技術の実習を始めた。最初の年度は、タイ種の繭を使用したため、糸の量が少ないのと、繭不足のため1906年3月には女子4人が4日しか実習しなかったりして、結局6カ月で8.86kgの生糸しか生産できなかった。1905年度の収支を、コーラート試験場に限って次のように計算している[KS. 13/225]。

支 出	
桑畑維持費（年間）	4,192
繰糸経費（半年）	546
男子実習生給付金（年間）	3,456
女子 〃 〃 （半年）	936
9,130バーツ	
収 入	
生糸 8 kg 売り上げ金	200
粗糸 46kg 売り上げ金	150
350バーツ	

1906年にはブリーラムでも実習生を集めて、繭の飼育、繰糸法を教え始めた。コーラート、ブリーラムで実習生を受け容れて教えるのは、土地の住民に直接教える指導員を養成して、知識の普及をはかるためであった[KS. 13/351]。そして、住民に教えられるだ

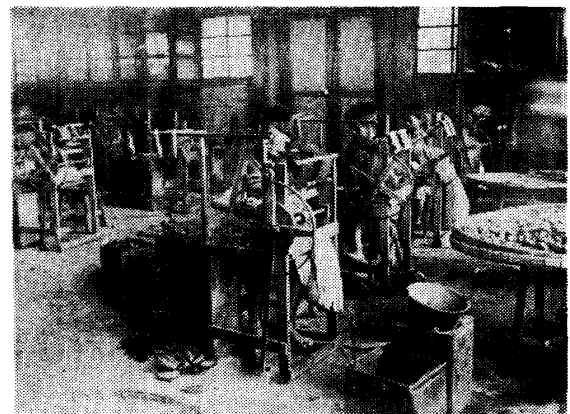


写真6 日本製座繰機械を使用するの繰糸実習風景



写真7 古来からの繰糸器具

13) コーラート、ブリーラムをセンターとして、東北タイの各地にタコ足のごとくサブ・センターを設置して、蚕種改良、製糸技術の普及に努めようとする構想は、横田によるものであったが、横田もまた外山と同じくその方式を日本の農事試験場の方式に学んでいる。横田はタイ国に赴任する前は、滋賀農事試験場に勤務しており、その時の経験が東北タイの地で生かされたものと想像される。筆者がタイ国留学中、ブリーラム出身の友人が郷里で出家することになり、得度式に参列するため、ブリーラムの友人宅に宿泊したところ、その友人の祖父が、50年前、日本人が養蚕を教えに来ていたと話していた。当時は何気なく聞いていたが、いまにして思えば、横田のことを語っていたのである。また、在タイ国大使館日本広報センター所長安藤浩氏は、農務省の役人で、横田のことを知っている人がいた、と語っていたが、その役人とは、おそらく横田らの教え子であろう。横田は帰国後、郷里である滋賀県虎姫村に帰り、虎姫村の村長を勤め、1943年12月13日死亡している。

けの知識を体得した卒業生が生まれると、まず、プッタysonに支所を開設して、実験してみた。繭を蚕業局が買い上げ、住民に座繰機械で生糸を作らせ、でき上がった生糸は蚕業局のものとなるが、習熟した住民には日本製の座繰機械を1台配布するという方法であった。まず、草ぶき屋根、竹で編んだ壁の簡単な建物をたて、村長たちを集めて、蚕業局の主旨を説明し、それから住民を集め卒業生が指導する方法をとった。講習を受けに来た住民は、9～11月の繭を使い切るまでの3カ月間で、126人になった。20日で習い終える者、1カ月で終える者。習熟すれば、座繰機械各1台を配布した [KS. 13/256]。結果は予想以上の成果を上げ、この年には61人が終了し、61台の座繰機械を配布した [KS. 13/351]。折しも、バンコクの養蚕学校卒業生10人が農務官吏として任官することになり、1908年5月に、東北タイのプッタyson (Phutthaisong), ラタナブリー (Rattana-buri), パヤックプームピサイ (Phayakphumphisai), スワンナプーム (Suwannaphum)¹⁴⁾ に、住民のための支所を設けて、バンコクの養蚕学校卒業生を所長に、コーラート、ブリーラムの卒業生を

14) コーラート、ブリーラムを含め、これらの地域の住民を、ペン親王はラーオ族と呼び、今日も東北タイ住民を民族的にはラーオ族と呼んでいるが、コーラート地方はクメール・コーラートと呼ばれるクメール族の居住地域であった。とりわけ、ブリーラム、スリン、シーサケート地方は、クメール族の居住地域である。筆者の友人であるブリーラム市内出身の男は、プノムベン放送の80%は理解でき、クメール語が話せるといっていたし、クメール族であるといっていたが、すでに100年以上もタイの王朝に帰属して、カンボジアへの帰属意識は全くない。横田が現地調査して設置したこれらの試験場や支所は、ほとんど全てムーン川流域のクメール族居住地域にあたる。タイでの養蚕業はタイ族の民族移動とともに、中国からもたらされたといわれているが、タイ族、ラーオ族の移住以前から、先住民であるクメール族の間で行われていた家内産業でもあったといえそうである。



図3 養蚕試験場および支所を示す
東北タイ略図 (20世紀初頭)

指導員にした [Loc. cit.]. 住民は喜んで座繰機械を使用し出した [KS. 13/461]。

1909年度には、さらにローイエット (Roiet), シーサケート (Sisaket), チャヤプーム (Chayaphum), チャトゥラット (Chaturat) にも支所が開設された。

でき上がった生糸の土地価格は、サイゴン生糸と同価格になった [KS. 13/351]。

従来の繰糸法による上質生糸	
1 ハープ (=60 kg)	700バーツ
従来の繰糸法による普通生糸	
//	400バーツ
サイゴン生糸	
//	1,000バーツ
座繰機械による生糸	
//	1,000バーツ

1909年1月に、東北タイ地方を視察したペン親王は、こうした努力と座繰機械の普及をみて、新技術は非常にポピュラーとなり、将来大いなる発展が期待されると農務省に打電している。さらにウボン駐在の総督サンパシ

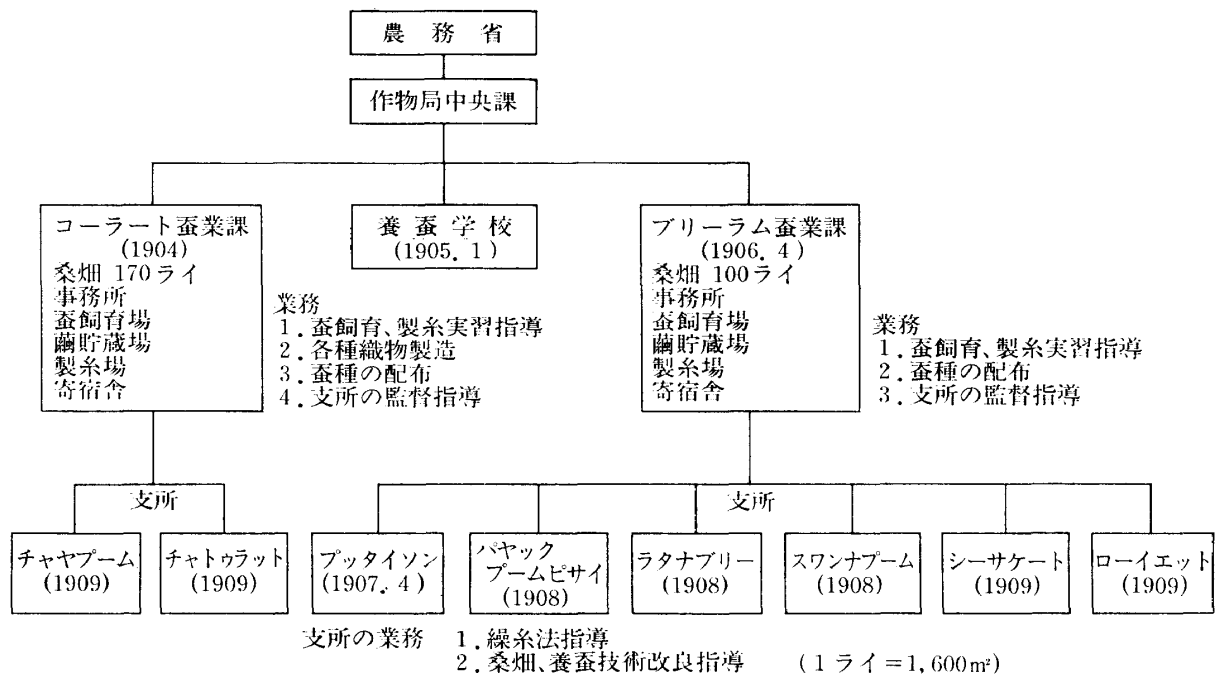


図4 タイ国農務省蚕業関係部局組織図

表6 1908年度、受講者数と終了者数、座繰機械配布台数

地 区 名	受講者数	終了者数	配布台数
プッタyson	299	134	96
ラタナブリー	581	399	234
パヤックプームピサイ	161	78	78
スワンナプーム	133	74	73

表7 1909年度各支所の受講終了者数

地 区 名	受講終了者数
プッタyson	104
ラタナブリー	96
ローイエット	32
シーサケート	120
パヤックプームピサイ	74
チャヤプーム	54
チャトゥラット	121

ッティプラソン親王も関心を持ち、ウボンにも開設を希望していると伝えた [R. 5 KS. 8/2]。ペン親王はバンコクに帰着後の報告書の中で、配布された座繰機械を用いていないの

は、繰るべき繭が不足している家であって、繭さえあれば座繰機械で生糸を作っており、使っていないのなら機械を売ると尋ねれば、誰も売ろうとしない、住民がいかに関心しているかは明白であり、今後も配布すべきである、ただし、日本からの輸入機械は、日本では2パーツ程度であっても、タイのコーラートまで輸送すれば2倍から4倍もかかり、配布するには費用がかかりすぎるので、ブリーラムの職員が日本の座繰機械と同じ機械を現地で作成し、試用の結果、日本の機械で作ったのとかかわらぬ生糸ができるので、今後は現地製機械を配布する、と述べている [Loc. cit.]。無料で配布することに、ダムロン親王は住民の負担において配布、つまり有料にすべきであると示唆している。ペン親王はサンパシッティプラソン親王の要請により、1909年、ウボンへ職員と指導員を派遣した [Loc. cit.]。

1910年までに配布した座繰機械は1,159台に達した。従来からの旧式のまま使用してい

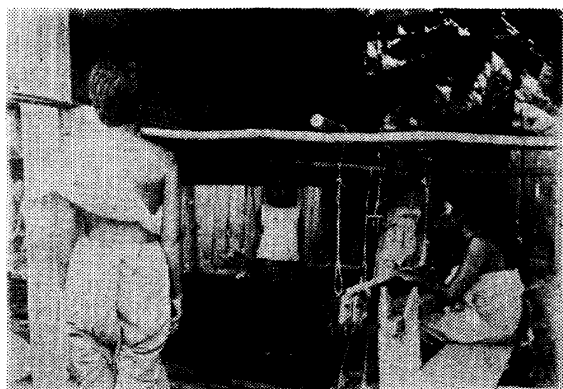


写真8 農家の床下で織られる伝統的方法

る台数が10,508台であった [KS. 13/546]。ラタナブリーでは新式が3分の1を占めるにいたっていた。

蚕糸生産技術の改良が軌道に乗ると、次は織物の改良に着手しようと、横田はコーラートで織物の改良普及の許可を受け、1908年4月に一時帰国した。そして同年8月には、織物教師として飯塚亀吉、飯塚ハナの父娘を伴ってタイに戻ってきた。その際、日本から織機10台を輸入した [KS. 13/351]。1910年度には、各種絹織物あわせて1,737枚を織り上げ、ほかに、勲章につけるきらびやかな絹地を303フィート織り上げた [KS. 13/461]。翌年度も織物は順調に織り上げられ、農務省に納入した以外は売却し、1,003バーツ54サターの収入を得た。納入分を含めれば、全部の見積り価格は5,000バーツになった [KS. 13/608]。この年から、コーラートの蚕業局で作製した、木綿の改良型織機2台も用い出した。木製の織機は、織り方は易しく、値段も安かった。しかし、織り方に熟練するには、日本で5年かかるというのであるから、タイではそう簡単にはいかないし、織機の価格が座繰機械のような安価さではないので、普及するにはほど遠いといわねばなるまい。

1909年の1月には元気で東北タイを視察していたペン親王が、同年11月11日には病死した。局長は土地登録局、鉱山局を兼任している

プラーヤー・ボーロムバートバムルン (Phraya Börombatbamrung) が兼任することになった。そして、翌1910年度から、コーラート、ブリーラムの蚕業試験場は、農務省所管から地方長官 (Khaluang Thesaphiban) と県知事 (Phu Wa Ratchakan Mûang) の指揮監督下に置かれるようになった [KS. 13/546]。さらに、1911年度から、蚕業技官、農務職員は各郡長の指揮監督の下で、養蚕、桑園経営、製糸、織物、その他の農作物の指導にあたることになった。

IV 日本人蚕業顧問の消滅と評価

(1) 日本人蚕業顧問の消滅

横田らの東北タイでの活動に常に理解を示していたのはペン親王¹⁵⁾であった。蚕業局創設当初に、外山らと東北タイを調査し、病死する10カ月前、すなわち1909年1月に1カ月をかけて東北タイを視察して、試験場の支所増設、座繰機械の配布という方針を強く支持し、住民の所得向上を推進しようとした。ペン親王の死を最も惜しんだのは、最大の理解者を失った横田らであったろう。そして、翌1910年は天候不順、少雨のため、桑の生育は悪く、また蚕病が流行して、住民に配布し

15) ペン親王は、“Lao Damnoen Sai” “Lao Damnoen Kwian” というふたつの歌を残している。このふたつの歌は、いまでは “Lao Duang Dũan” という題名で呼ばれ、今日もタイ歌曲として歌われ、レコードにも収録されている。たて笛の音をバックに哀調を帯びたスロー・テンポの曲で、歌詩は、いとしい女性を偲び、月を見ながら眠りにつくという内容である。最初の歌詩の題名から想像するに、東北タイ特有の土埃の道なき道を、牛車に乗って旅した時に作ったのであろうか。ペン親王の死に対し、横田は大変残念がり、学校開設、各地の試験場設置、蚕糸技術改良は全てペン親王の尽力によるものであり、いままでは逐一ペン親王に相談して改善に努力してきたが、今後は一体誰に相談すれば良いのか、と農務省宛報告書の中で歎いている。

た蚕種が50%も死んでしまう不運に見舞われたが[*Loc. cit.*], それにも増して、人為的な組織の改組が実施され、日本人はいなくなり、蚕業局はいよいよ消滅する運命となった。

蚕業試験場は、従来農務省蚕業局に直属し、蚕業局の下部課として活動していたが、1910年9月より、地方長官、県知事、郡長の監督責任下に置かれ、就業規則も大幅に変わった。すなわち、外国人所長は廃止し、2級職員ひとりと蚕業指導員ひとりを置き、他の全ての職員は配置換えとなり、郡長の下には蚕業職員をひとり置くだけとなった[*Loc. cit.*]。地方産業に関係する部局は、農務省から内務省に管轄が変更されたのである。1911年には、下級職員を残して、蚕業関係職員は全員本省に召還され、9月になって改めて各州に配属されていった[KS. 13/609]。この時、最後まで残っていた日本人、横田と飯塚はコーラートを去った。農務大臣は、チャオプラヤー・テーウェートウォンウィワットが病弱のため、1909年12月16日からは副大臣プラヤー・ウォンサーヌプラパット(Phraya Wongsanupraphat)が大臣に昇格したが[Krasuang 1966: 26], 1912年4月1日には土木大臣となって転出し、かわってラートブリー親王(Phraṇṇao Phi Yathoe Krommamūn Ratburidirekrit)が農務大臣に就任した[*Ibid.*: 34]。そして、1913年、蚕病の流行、蚕糸業への投資は採算が合わないという理由で、各地の試験場および支所は廃止となった[*Ibid.*: 97]。

(2) 日本人蚕業顧問に対する評価

日本人蚕業顧問が実施した養蚕開発、蚕糸改良の事業に対し、最も厳しい評価を下したのは、永年農務省顧問の地位にあったGrahamである。何百人もの女性に無料で講習を受けさせ、無料で機具を配布してみたところで、彼女らの無気力、無関心には何の効果も

なく、厄介で不経済な方法は馬鹿にしか通用しないと一般に評価されていたという[Graham 1924: 88]。実習を受けた娘たちが家に帰るや、いままでの新知識はかなぐり捨て、相かわらずお婆さんから教えられた方法で始め、配布された流行の日本製機具は屋根裏に祭り上げられ、機具にまつわる神妙なからくりが家族に幸福をもたらすかもしれないと期待された、と述べている。そして、専門家の努力は逆に事態を悪化させたとまでいい、絹に関していえば、1922年の状況はラーマ5世が開発に着手する前の1901年と全く同じ状況であると断言している[*Ibid.*: 89]。

Grahamの辛辣な評価に対し、田原らの教え子であり、横田とともに働いたプレーヤー・アーハーンボーリラックは、「1. 政府は何百万バーツも投資したにもかかわらず、何の成果も得ていない、といわれている。確かにそうであるかもしれないが、使った費用は実験と初期の準備のためである。直接、住民の指導教育に用いた費用は、200万バーツにも達しないであろう。2. 住民が新式の繰糸機械を好まなかったというのは、一部は事実である。無知無学で怠惰な住民は、新式の面倒なものより、先祖伝来の簡便なのを好み、容易に新式のものにかえようとはしない。しかし、新式の繰糸機具を使おうとした者も少からずいたのである。新式の機械で生産した生糸は良質であったので、住民はこぞって自分らで織り上げ、高い値段で買い上げてくれる蚕業局に売却し、市場に出回らなかったのである。今日でもプッタysonの一部の家庭で、配布された機具を用いている。でき上がった生糸は、自分で織物にしてから売った方が、生糸のままで売るより儲けが良いのである。3. 蚕業局が住民を指導したのはわずか4年であり、わずか4年で住民の意識をかえられるものではない。1911年、蚕業育成を廃止する方針を農務省が検討していると聞い

て、当時コーラートの地方長官プラー・カムヘーンソクラームは、わざわざバンコクまで出向き、ラートブリー親王に会見して、あと3年の継続を要請した。しかし殿下はお認めにならず断行した。もし3年の要請を認めておれば、絹織物はいまほどには廃れていなかったろうに。蚕糸業育成の廃止を、政府は性急にすぎたと筆者は考える。いまもう1度始めるとすれば、少なくとも10年にかかるだろう。そう思えば実に惜しい気がする」[Ahanbörirak 1936: 70-71]。

横田らが去って約60年後、タイ政府からの要請を受けて、日本の国際協力事業団による養蚕開発技術協力が1969年より実施され、すでに11年が経過し、まだ続けられている。1968年に予備調査のため、コーラート県ピマーイを視察した日本人調査団は、「その事務所の一角に、この試験場が模造した日本の旧式の繰糸機4～5台据付けられている」のを発見している[国際協力事業団 1978: 44]。明治の座繰機械は現地で継承されて、立派に使用されてきたのである。発見の1年後には錆びつき、2年後には撤去されていたというが、その直前、再び日本人による養蚕開発の協力が始まった。いま、まさに命脈が絶たれようとした時にである。

“縁と浮世は末を待て”という諺があるが、もはや、明治の蚕業顧問時代の痕跡は、何もない東北タイで、旧式の繰糸機にじっと目を凝らし、錆びて、撤去されていくまで、立ち寄るごとに注意を払っていたのは、ほかならぬ日本人養蚕専門家であった。

おわりに

日本から輸入した蚕種は消えて、在来ของไทย種に戻ってしまい、日本製座繰機械や織機が役立たずになっていたことを挙げれば、明治の蚕業顧問グループがタイで行ってきた

事業は、浪費と徒労の全く無駄なことであったという結論になろう。しかし、独立の危機に瀕しているアジアの一国の現状を真剣に取り上げ、その独立維持、殖産興業に手を貸そうとした日本人外交官稲垣の呼びかけに、チュラーロンコーン王やダムロン親王は、日本側の計画通りに資金を出し、全ての進行を日本人に委ねるという大様さで応答した。その背景には、蚕糸業の発展による日本の「富国強兵」という手本があったからである。ただ、不幸なことに、日本側はタイの気候風土、住民の国家意識、気質を知らず、タイ側は養蚕業開発の難しさを知らなかった。養蚕地域東北タイを知らない点では、タイ側も日本側もそれほど差はなかったのではなからうか。資金の乏しいタイ国は、勢い現実的に対処しなければならず、10年かけて採算がとれなければ、打ち切らざるを得なかったのだろう。同じころ、バンコク近辺での運河開削事業、稲作田地の開発が急速に進んでいた。フランスの脅威が去ってしまえば、辺地の産業開発よりも中央部の産業開発に投資する方がはるかに効果的と考えたのであろう。中央政府が再び東北タイの開発に着手するのは、それからちょうど半世紀過ぎてからである。この時は、共産ゲリラの浸透という、共産化への脅威からであった。

タイの独立維持、殖産興業のためという稲垣の精神は、タイ側の十分な理解と共感を得たとはいえないが、専門を同じくするペン親王、外山、田原、横田らの間には、養蚕試験場の設置、学校の創設、優良蚕種と座繰機械の配布という事業を通して、後継者の養成、科学知識の普及、新技術の導入、地方住民の生活向上などの共通の目的達成のために努力し、地位や国籍の違いを越えて大いに共感、共鳴するところがあった。近代農業の知識や技術が全くゼロの状態から、20世紀前半の農務行政を担う有能な官僚を育て、自然科学、

社会人文学系の総合大学として立派に成長したカセートサート大学の基を開いた蚕業局の日・タイ当事者たちは、声高に自慢せずとも、ひそかな誇りにして良いはずである。

本稿の執筆にあたり、多くの方々から資料を借覧させていただいたが、とりわけタイ国立公文書館保存の文書閲覧の機会がなければ不可能であった。タイ国での調査を可能にさせていただいた関係機関に記して感謝したい。また、論文に添えて使用した写真は、全て当時の蚕業技師細谷善助氏が写した写真である。ご遺族細谷健肆氏のご好意により、保存されていたガラス種板のネガから焼き付けさせていただき、生き生きとした様子を伝えることができた。末尾に記して感謝したい。

文 献 目 録

- 浅井良夫. 1980. 「産業革命」『日本近代史要説』東京：東京大学出版会.
- 外務省外交史料文書 (3—8—4—16). 「別冊 暹羅国の部」『外国官庁ニ於テ本邦人雇用関係雑件』—— (分類番号なし). 1902. 『稻垣満次郎綴』
- 稻垣満次郎. 1898. 「日暹条約の精神及条款」『東邦協会会報』50.
- . 1906. 「暹羅国の現状」『東邦協会会報』132.
- 石井寛治. 1979. 『日本蚕糸業史分析』東京：東京大学出版会.
- 加藤集次 (編). 1928. 『本邦に於ける一代交雑蚕種の発祥史』松本：一代交雑蚕種発祥記念会.
- 国際協力事業団. 1978. 『タイ国養蚕開発協力』東京：国際協力事業団.
- 町田次郎. 1940. 「外山先生の業績」『外山亀太郎記念録』
- 中村孝志. 1978. 「シャムにおける日本人蚕業顧問について——明治期南方関与の一事例——」『南方文化』5.
- 瀧澤秀樹. 1978. 『日本資本主義と蚕糸業』東京：未来社.
- 東邦協会. 1892. 『東邦協会会報』16.
- 山田盛太郎. 1979. 『日本資本主義分析』東京：岩波書店.
- 山口 武. 1966. 「『シャム』滞在時代の安井女史に就て」『安井てつ先生追想録』東京：安井てつ先生記念出版刊行会.
- 安岡昭男. 1976. 「東邦協会についての基礎的研究」『法政大学文学部紀要』22.
- 吉川利治. 1977. 「ラオスの伝統的統治体系」『東南アジア——歴史と文化——』7.
- . 1978. 「『アジア主義』者のタイ国進出」『東南アジア研究』16(1) : 78-93.
- Ahanbōrirak, Phraya. 1936. Prawat khōng krom rū kōng chang mai. *Nangsūphim Kasikōn* 10(1).
- Chumsai, Manit. 1976. *Chut prawattisat rō.sō. 112 chak faem tai thun sathanthut thai nai parit.* Chaloenmit.
- Ekkasan krasuang kaset thi mi yu nai hō chotmai het haeng chat.
- KS. 13/13. Krasuang kaset chāng pr. toyama chao yipun ma truat kan tham mai.
- KS. 13/32. Phanakngan yipun pai truat kan tham mai nai monthon nakhōnratchasima.
- KS. 13/37. Phraongchao phenphatthanaphong yūn raingan truat kan tham mai nakhōnratchasima.
- KS. 13/38. Krasuang kaset hai mittoe toyama nai chang mai khūn pai truat kan tham mai mūang tangtang.
- KS. 13/39. Khō hai krasuang nakhōnban sū thidin sūng cha tham mai.
- KS. 13/63. Ngoen kha doen thang samrap chāng phanakngan yipun song nai kap ngoen kha khūrangmū tham mai.
- KS. 13/71. Mittoe toyama yūn raingan thi cha thotlōng tham mai suan lae na.
- KS. 13/99. Mittoe toyama song raingan rongrian sūng dai thawai somdet phrabōrom-rachini.
- KS. 13/124. Mittoe toyama chi chaeng rūang kan pluk ton mōn kan phasom rang mai lae khō anuyat sū katha lae khūrangmū samrap chak rang mai.
- KS. 13/128. Krom phōpluk khō tō sanya mittoe yokota, mittoe michima, mittoe kano, mittoe hosoya, nai nakamura kap loek sanya nai thakahachi.
- KS. 13/130. Krom phōpluk khō anuyat chāng mittoe ti nakamura pen phuchuai.
- KS. 13/143. Krom chang mai song raingan kan prasom phan yipun kap thai.
- KS. 13/158. Phraongchao phen yūn raingan pra chām dūan krom chang mai.
- KS. 13/166. Krasuang kaset chāng achan yai samrap rongrian tham mai.
- KS. 13/171. Krom phōpluk khō anuyat chāng mittoe thakhahachi phanakngan yipun ma pen phu chuai thaen mittoe nakachima.
- KS. 13/173. Krasuang kaset tang tamnaeng athibōdi krom tham mai.

- KS. 13/198. Mit hirano khǒ la ǒk čhak krom tham mai.
- KS. 13/208. Krom phǒpluk khǒ anuyat phoem ngoen dǔan mit kokanesawa, mittoe ichida, mittoe nakachima, mittoe omuni, mittoe takangin.
- KS. 13/221. Krom chang mai khǒ hai mittoe ti khawata kap nai nakachima thi thǔng kae kam dai rap ngoen dǔan pen bamnet.
- KS. 13/225. Raingan krom chang mai pračham pi rǒ.sǒ. 124.
- KS. 13/256. Krom phǒpluk yǔn raingan pračham pi sok 126.
- KS. 13/282. Krom phǒpluk khǒ anuyat čhang mittoe yokota, mittoe takano.
- KS. 13/351. Mittoe yokota yǔn raingan khwam hen čhat kan chang mai tangtae raek lae thi čha čhat tǒ pai.
- KS. 13/461. Raingan kǒng chang mai monthon nakhǒnratchasima sok 128.
- KS. 13/546. Raingan kǒng chang mai monthon nakhǒnratchasima.
- KS. 13/608. Monthon nakhǒnratchasima song raingan kǒng chang mai pračham pi 130.
- KS. 13/609. Monthon ubonratchathani song raingan kǒng chang mai pračham pi 130.
- Ekkasan ratchakan thi ha thi mi yu nai hǒ čhotmai-het haeng chat.
- R.5 KS. 8/1. Raingan phraong phen, raingan mittoe toyama rūang tham mai (10 mi.khǒ. 120–16 tǒ.khǒ. 122).
- R.5 KS. 8/2. Tham mai (27 sǒ.khǒ. 123–13 kǒ.phǒ. 127).
- R.5 KS. 10/3. Khǒ anuyat tang krom phǒpluk lae hai phraong phenphatthanaphong pen athibǒdi.
- Graham, W. A. 1924. *Siam*. Vol. 2. London: Alexander Moring Limited.
- Ingram, James C. 1971. *Economic Change in Thailand 1850–1970*. Stanford: Stanford University Press.
- Jeshurun, Chandran. 1977. *The Contest for Siam 1889–1902: A Study in Diplomatic Rivalry*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Kǒng Čhotmai-het haeng Chat. 1978. *Samphanthaphap Rawang Thai—Chin*. Krom Sinlapakǒn.
- Krasuang Kaset. 1966. *Prawat Krasuang Kaset*. Krom Sinlapakǒn. 1968. *Ruam Rǔang Mǔang Nakhǒnratchasima*.
- Mikuson, Phaithun. 1974. *Kan Patirup Kan Pokkhrǒng Monthon Isan nai Ratchasamai Phrabat Somdet Phra Čhunlacǒm Klao Čhao Yu Hua*. Bhannakij Trading.
- Prachathipok, Phrabat Somdet Phra Pok Klao Čhao Yu Hua. 1927. *Phraratchadamrat nai Phrabat Somdet Phra Chunlacǒm Klao Čhao Yu Hua song thalaeng Phrabǒromrachathibai kaekhai Kan Pokkhrǒng Phaendin*. Khamnam.
- Weiler, Clemens. 1977. Khon Yoeraman kap Thang Rotfai Sai Raekraek nai Mǔang Thai. In *Yoeraman Mǒng Thai*, edited by Khlaio Weng and Khlaio Rotsenbaek, pp. 103–132. Khlet Thai.
- Wongsanupraphat, Chaophraya. 1941. *Rǔang Prawat Krasuang Kasettrathikan*. Krom Sinlapakǒn.